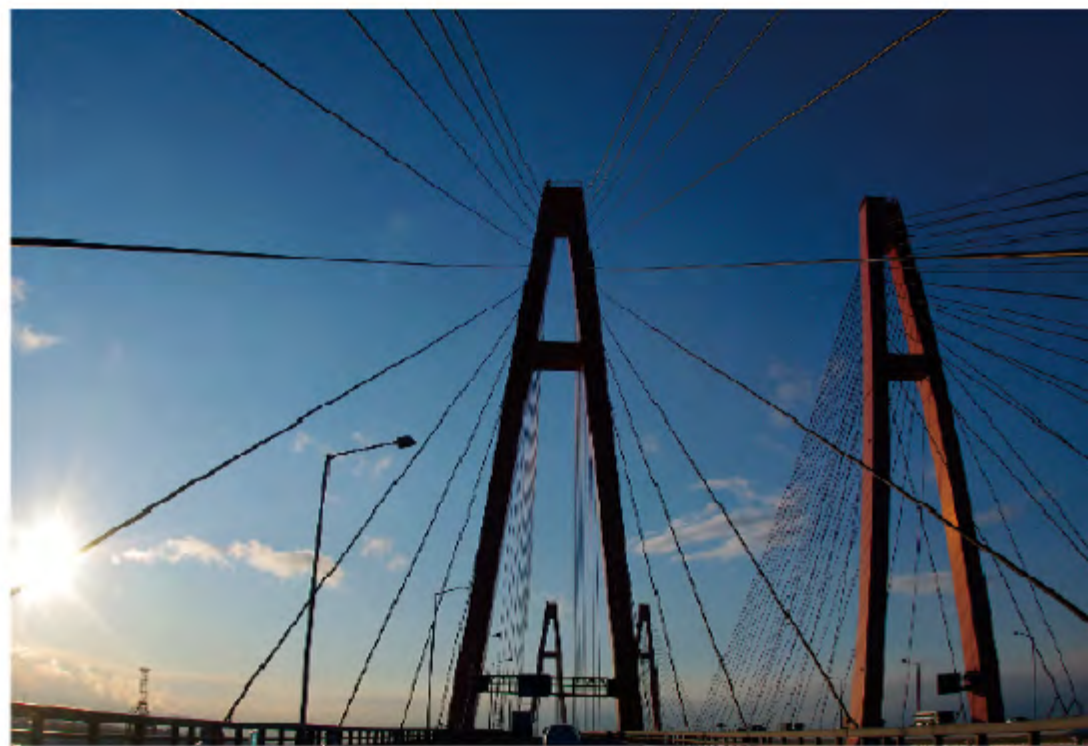


あを

1

2013



東名高速道 .00

何よりも君の見る通りに描くこと

カミーユ・コロー



Camille Corot
カミーユ・コロー
風景習作（デッサン）

あを

一月



函 館 佐藤喜孝

雪近し茂邊地の驛は一軒家

零餘子とり大きなこゑはつつしんで

むかご飯大きな零余子当りけり

しぐれ函館烏賊の白眼の道にあり

冬燈慕ひ寄りくる沖つ波

一燈の沖に生ずる冬荒海

どこよりの明りか冬の夜の海

喜孝は親がつけてくれた名前だがあまり好きではない。姉の名は由紀、男子だと決め「ヨシノリ」と読ませるつもりであつたが意に反したので名前をつける氣力が失せ字はそのままだに届けたさうだ。姉は学校の備品に「由紀子」と書いてゐた。電話で私の使用字を訊かれると「喜んで親孝行のコーの字です」で通じてきた。つひ先だつて同じ経験をしたが、通じなかった。「オヤコーコー」は死語になつたやうだ。一度「喜劇のキに忠孝のコー」と言つたが上手いかなかった。二人の弟は喜行、喜信とまるで八犬伝のやうで三人とも名前負けしてしまつた。といふ訳で名前をつけるのが怖ろしくわが子は堀内一郎さんが名付親。おかけて素直で健康に育つた。孫はティリ・エイマと正一。簡潔でよい。エイマをいたづらに「咲菜」と当ててみた。

十一月

篠田純子

搔卷があれば母なぞ要らぬわい

風邪の熱夢は饒舌な展開

小六月河鴉はしやいですぐ浮ぶ

栗を煮る明治の人のやうに煮る

もみぢ且つ散り円墳の匂ひけり

秋の暮奥歯にセメン詰めらるる

冬立てり南無喝羅恒那多羅夜耶なむからたんのうとらやーやー

十月の半ばに風邪をひいて了った。微熱と喘息のような咳が出て、点滴をしてもらい、四・五日寝ていた。こんな事は何年ぶりか。

暇なので源氏物語を読み始めた。

我家の本棚には古本が多く紙魚が住みついている。防虫にと鳩居堂で匂袋を買い置いてある。なので、源氏物語（田辺聖子）を開くと、床しい香が立ち千年の昔の雰囲気満ちてきてどんどん読み進む。忍び歩きには、心ときめかせ、道ならぬ恋にスリルを感じた。須磨に流された時は、どうなる事かと落胆した。次々と美しい男女が現われ夢のようだ。私の頭の中はすっかり平安時代に取り憑かれて了った。特に六条の御息所に興味湧き「女つてこわいわ。」と言いつつあつという間に読破して了った。

暮れいそぐ

定梶じょう

魚信あり延べ竿の先天の川^{あたり}

行商が荷をひと揺すり鳥渡る

かりがねや神事篠笛ひよろりひよろり

冬に入る血圧計の数値かな

綿虫のふれたる水の面さざなみす

消し忘れたるかにひとつ冬烏賊火

暮れいそぐポストの他は色なき街

ふり返って、句作りの要領が少し分ってきたかなと感じたのは、類句を恐れなくなつた頃だつたらう。一句詠むなら十句読め、十句作るなら百句よめなぞと初心の時言われたが、類句に拘らなくなつたのは、ひとの句をよく読んだことであつたのは確かだ。

類句と似た言葉に類想句があるが、万葉の昔から現在に至るまで、言ってみれば文化を同じくする以上類想の句歌は当然のことだから、これは恐れる必要がないと思う。

小沢碧童にへ初午や煮つめてうまき焼豆腐〉があり万太郎にへ——煮しめて——が あつて、何れが先行する句か知らないが、殆んど同時代の二人だからむしろ、どちらかの盗作だとは逆にいえない。しかし碧童句は万太郎の「煮しめて」の措辞に一步ゆずると思つ。



須賀敏子

棗の実音無く落ちて土の色

鵪鶉を避けて自転車おぼつかず

晴四日急いで剥いて柿すだれ

秋澄めり原発止めよのデモのなか

風止んで庭一面の杉落葉

牛を愛で畦に起つ日々那須風

冬桜咲く古里の要金寺

十一月四日秋晴れの中「さよなら
原発 in 所沢」のパレードに参加し
た。所沢駅周辺を一時間、黄色の風
船を持ち「原発いらない」「放射能
から子供を守れ」「狭山茶守れ」「大
飯は止めろ」等々声を合わせて歩き
ました。ここまで原発を増やしたの
は自民党前政権と共に無関心であつ
た私達にも責任の一端はあると思つ
たからです。

那須塩原で乳牛を飼う稲作を続け
て来た義弟が、十一月二十八日癌の
為六十五才で世を去った。昨年三月
十一日以降からの放射能被害と風評
被害に、日々心を痛めていたと妹か
ら聞いた。こんなにも早く病を重く
したのは原発被害のストレスも遠因
になったのではないかと思われて仕
方がない。

お香買ふ

田中藤穂

早ばやと忘年会の話かな

虫絶えぬ深夜テレビの方丈記

忘れしこと忘れぬこと冬の蜂

二歩三歩すさりて転ぶ冬畳

お香買ひ十一月の小店出る

雀飛ぶ壺の薄に夕陽差し

近々と見え冬晴のスカイツリー

うちの前の小さな貸店舗が三年程前から古本屋さんになった。開店の時小さな菓子折をもつて挨拶に見えた。まだ五十にならないような女の方で三人の子のママだそうだった。古本屋さんの方から見るとこの古い私の家がとても趣があるそうで、この辺の静かな雰囲気を中心に好んでいるようだった。私も本は好きなので時々行つて面白そうな本を買い、田端の昔の事や田端に住んでいた文士や著名人の話などしたりして親しくなつた。それなのにこの十一月で店を閉めるので今整理出し中なのだ。

今日行つてみてドナルド・キーン日本文学散歩という一冊に何か心をひかれて、少々表紙が古びていたが買つてきたのです。炬燵の上で表紙を開いたら何と「井上靖先生 恵存 ドナルド・キーン」とサインが入っているのです。凄い！お店がなくなるのは、とても残念ですが、最後に思はぬ福が飛びこんできたようので今日は一人で幸福感と充実感に浸つております。

2012・11・21

月影 長崎桂子

吠える犬唸る犬をり今朝の冬

立冬の車のガスの噴き出口

日溜りに繚乱なごむ帰り花

幼少の面影残る帰り花

青春を疎かに過ぐ帰り花

一茶忌や鋤き起す田に群れ雀

庭の木々十一月の月影に

寒さが急にやって来た。

冬の用意を慌ただしく取り敢えず大雑把にしたが、屋外の樹木の葉は十一月上旬なのに青々としている。長かった残暑の日差から、住居や身を守ってくれていたのはとても嬉しかったが、北西のやや強く冷たい風が吹く様になり、まだ青々としているのに違和感を感じている。

甚だかってで後ろめたい気がするのですが、北や西の風が強く冷たくなつてからは、枯葉の音と落葉を追いかけるようにして、ゴミ袋に詰めたのを懐かしく思い出す。そして暖かいひざしがあつてほしいと願つて居ります。



早崎 泰江

誰からも音沙汰のなし鰯雲

へりの列行方はいづこ鳥渡る

小鳥来て風音消えし竹林

ひつそりといつもの場所に杜鵑草

山茶花の苔たつぷり出番待つ

憂きことをしばし忘るる紅葉かな

大地震師走の心ゆれ動く



『みづおと』

堀内 一郎

(一九七二年)より

東京時雨のこる櫓をしたたらす

のびのびと豆腐沈ませ妻の冬

みゝづくの耳持ちあるく冬の町

えびす講海とほければ鶏つぶす

枯園抜ける一言ももらさずに

針山に針あつまれり母の冬

枯れる故郷レグホン卵生みついで



柿

森 理 和

柿を剥くきのふはおけさけふ次郎

冬黄葉葉缶ちりちりカフェ静か

坦坦と十一月は足早に

目の醒むる赤に変身唐辛子

紅葉溪するする籠に串団子

旋回の尾翼にルージュ冬うらら

すつぽりと銀杏黄葉に小さき寺

「内藤唐辛子」八房^{ヤブ}とも

江戸野菜の一品で、現在の新宿御苑から大久保あたりまで、秋には真っ赤に染め上げる程に栽培されていた様です。その美しかった光景を、この賑わいの新宿の街に取り戻そうと、二〇〇八年からそのプロジェクトが活動を始めた様です。知人からその流れのビニールポット入りの小さな苗を二鉢いただきました。

ネットを開いてその意気込みに驚きました。その意気込みに、遙か及ばない出来ですが、美しい唐辛子の色は本物です。漬物に炒め物に使い始めています。



吉成美代子

瑠璃色の湯吞が二つ秋の暮

単線路曲りまがりてすすきの穂

駅ビルのチャペルの鐘と冬青空

電球はLEDや老の冬

脱ぐブーツ緊張を解くかたち

参道を占めて昼餉す蝉時雨

山茶花や猫ゆうゆうと通り過ぐ





吉弘恭子

掌にとどまる香り銀木犀

久方の雨に濡れゐる曼珠沙華

何時となく冬空に浮く飛行船

風先のままに尾花の枯れもやう

青空にとけてゆくなり冬の蝶

糸底にあづく掌温め酒

髪切っておでこのまるみ日向ぼこ

白鳥は哀しからずや空の青海のあ
をにもそまずただよふ

福島の上春から新潟市に移り住んだ頃、今思い出すと学校へ上がる前だったと思う。隣の家に大学生くらいのお兄さんがいた。家の人の話では結核を患って大学は休学中ののと。記憶は薄れてあまり覚えてないが、東京に越してくる時、白秋の歌集をいただいた。今手元に残っていないが、先日新聞で上記の歌を見つけた。頭の隅に残っていたのだこの歌が。六十五年以上前の記憶、よほど気に入っていたのであろう、この歌が。

牧水も夢二も青は寂しといふ

木村茂登子

所沢航空公園

赤座典子

木漏れ日や確と燃立つ冬紅葉

冬暖ふうふうと吹くホットテイ

犬も猫も人ものびのび冬木立

着ぶくれて操縦席の顔真面目

ぴちぴちと高みを巡る冬の鳥

皇帝ダリアひらひらと咲き左見右見

風に逆らひ急ぐ日暮時

雨上りの午後、所沢航空公園を訪れた。「皇帝ダリア」が今咲いているという。初めて聞く名前では是非見たかった。

久し振りの公園は、道がまだ濡れていたが、かなりの人が、ウォーキング・ジョギング・自転車で廻っていた。犬の散歩も多い。

広い園内をぐるりと歩いたが、見つける事が出来ず、管理事務所で尋ねた。なんと殆ど目の前の所に二本立っていた。

茎の高さは三、四メートル、竹のように節がある。その先にピンクがかった薄紫の花が、沢山下を向いていた。花びらは八枚位の一重で、皇帝ともダリアともイメージが結びつかない。不思議なものに巡り合えた一時であった。

毒

大日向幸江

秋深く入浴剤の沁みとほる

懷手決りて拍子木響きたる

公園を囲む鉄棒静電気

吊されて怒り爆発鷹の爪

忘れぬやう小枝を折りし山眠る

暮れぬうちストーブ列車は荒野を行けり

闘志無き関取を見てふぐを煮る

いつものように奴が追つて来る。
昨日なんか、上野の芸大にまでさりげなく後を追ってくる、厄介だな。

奴に自分が気がついたのは、半月前だった。改札を出て駅前の人並の中誰かに見られている。背中がムズムズとするような視線を感じた。高島屋の大ウインドーに横目で奴の姿を捜す。おばさん五人、サラリーマン二人、その他六人自分を追いかけて来るような人物はウインドーの中には見つからない。

さあ今晚は、取引先の接待で赤坂の高級料亭「金丸」で河豚を食す。もちろん自分のリクエストだ。業界では誰も自分が誰か名前も顔も知っている人間はいないはず。どこにいても居る中年男の背中をどこからか見ている、尾行者以外はね。

地下鉄の階段を登りゆつくりと振り向く視野の中に赤いコートが立っている。

十二月

木村茂登子

黄昏はそのあたりから花八ツ手

年年歳歳古き佛に紅葉す

雪景色昨日より今日朝の富士

木枯一号訃報一号もてきたる

みっかびの蜜柑到来友健在

戦士等は翼をたたみ十二月

新参の野良猫がある十二月

一人暮らし高齢者対象の食事会の後
町内会長から「オレオレ詐欺」と押し
売りについて注意があった。

私のところにも

「茂登子はあちゃんオレだよ一番
上の孫だよ。」と男から電話がきた。

孫などいない冗談じゃないと思っ
た。だが後難を恐れて

「家には孫はおりません」と、早々
に電話を切った。

オレオレ詐欺では何千万円も騙し
取られた人が大勢いる。一生かけて
貯めた財産を一瞬にして失ってしま
う。取った方もあぶく銭、一瞬に使
ってしまふのである。

ひどい話である。

しかし騙しの理由によってはその
後の親子関係がどうなってしまうか
他所事乍ら心配である。



齊藤裕子

嬉しげに子に手をひかれ小春かな

冬晴や棟梁が使ふ草箒

真つ青にシャッター塗られ冬うらら

年忘れ賑はふ街へウオーキング

潔く胃カメラ吞んで年忘れ

着ぶくれて流星数ふ明け間近か

十二月LEDのごと流星群

息子が、お嫁さんの実家の敷地に家を新築中である。

我が家というところ、親から引き継いだ家のあちこちに手を入れなくてはならず、十二月に入って、塗装屋さんにペンキを塗って貰った。

夫は、五十肩の治療で、リハビリに通院中。なかなか良くなりならず、一月にMRIをやることになった。それに加えて、夜中に胃が痛くなつて戻したりという事が、間をおいて三回あった。さすがに気になり受診。胃カメラをのむ事になった。

大した事がないようにと願いながら、検査の日を待っている。

住まいも住人も、当分メンテナンスが続きそうだ。

前月抄

草の絮いちばんおそいあるき方

佐藤喜孝

遠き日の父懐かしき熟柿かな

斉藤裕子

水の秋鷺が鷺へと飛んで寄る

篠田純子

夜学の灯いま華やいで放課かな

定樞じょう

奥能登や休耕田に泡立草

須賀敏子

日短くなりましたねと別れけり

田中藤穂

灯消し湯に浴するや鉦叩

長崎桂子



石路を受け皿とせり金木犀
早崎泰江

竹藪の深深と垂る秋の雨
森理和

微睡は夏の落葉のなかにゐて
吉弘恭子

実むらさき並替へてる診察券
赤座典子

小春日の読む人を待つ伝言板
大日向幸江

尻上りして見る天の高さかな
木村茂登子

紅梅は空のとなりでひらくなり
佐藤喜孝

喜孝抄



十二月作品より

佐藤喜孝

遠き日の父懐かしき熟柿かな

斉藤裕子

父呉れし山のご馳走熟し柿

華をとり啜つてごらんよほら熟柿

など今月は熟柿にまつはる父恋の句がならぶ。眼前に今父があるがごとき臨場感を抱いて創れてゐる。大切なことである。掲句はその連作の総括である。近い時間に起きたことを懐かしむとはいはない。懐かしきむのは遠き日である。一考を要する。私は昨日も十年前も直列につながつてゐるといふより並列につながつてゐる気がする。きっと作者もさうなのではないだらうか。

水の秋鷺が鷺へと飛んで寄る

篠田純子

水の秋で一氣に広々とした水景が浮ぶ。つと飛びたつた鷺が下りた所が鷺の隣であつた、といふ何気ない句。しかし作者は“寄る”に心をのせる。この言葉で鷺に命が通つた。あたたかい句である。

夜学の灯いま華やいで放課かな

定梶じょう

「夜学」は秋の季語。一年中夜学はあるが歳時記には秋に分類されてゐる。確かに秋は勉学にいそしむにはよい気候である。夜間学校も放課後になると何となく燈火が華やぐやうに作者には見える。ただ見てゐる人には同じやうに見える灯火も夜学生に心寄せる人にはこのやうに見えるのでせう。作者の心が見た華やぎである。

奥能登や休耕田に泡立草

須賀敏子

背高泡立草は明治ごろに観賞用として入ってきたといふ。今では都会の空地で我が世の秋を謳歌してゐる。作者は奥能登の自然を訪ねる旅行をされた。しかし至る所に休耕田がある。奥能登だけが別世界ではなかった。当り前の風景を奥能登でも見るとはと嘆く作者である。目にしたものを簡潔に叙して心もちを伝へてゐる。背高泡立草は悪者になってゐるが悪者にしてゐるのは人間である。しかし、嘆くばかりではなく「能登に来て確か見えし天の川」と旅を満喫してこられた。

日短くなりましたねと別れけり

田中藤穂

顔見知りの人であらうか、すれ違ふ時交した挨拶がそのまま句になってゐる。鎌倉喜久恵さんの句に
日が永くなりましたねとすれちがふ

がある。同じやうな句作りだが印象は正反対。喜久恵さんの句は陽に向ふ明るさがあるが、藤穂さんの句は陰に向ふ淋しさがつきまとふ。日常、口をついた言葉がそのまま作品になったやうな句がある。

約束の寒の土筆を煮て下さい
母おそろし波菰草を食べなさい
山の香に盆の夜も冷ゆ寝らつさい
落花さあわたしの中にはいりなさい
桜散るあなたも河馬になりなさい
冬帽は焦茶ですよね翔先生
名月やユリノキ守る術ください
蠟梅は彼方ですよと手を翳す
きみもずいぶん飲みましたねと桜餅
川端茅舎
川崎展宏
高島茂
津田このみ
坪内稔典
久染康子
東亜未
須賀敏子
赤座典子

命令とも懇願ともつかぬ「……さい」が効果的に使はれてゐてそれぞれに面白い。

灯消し湯に浴するや鉦叩

長崎 桂子

秋の虫の中で鉦叩は特別な雰囲気の鳴き方を
する。つひ鉦の音をかぞへたり耳を澄ませて聴
いてしまふ。わが家にも毎年来て鳴いてくれた
が昨年は聴かず仕舞であつた。作者は鉦叩の音
に集中するため灯を消して湯浴みをする。鉦叩
へのおもひが伝はる句である。

石路を受け皿とせり金木犀

早崎 泰江

金木犀の金砂子が石路の広葉に見事に蔭かれ
てゐる。ありふれた自然界の営みだが、言葉で
書留めることにより一步作者と自然との距離を
近づけてゐる。

竹藪の深深と垂る秋の雨

森 理和

微睡は夏の落葉のなかにゐて

吉弘 恭子

緑蔭でのまどろみであらう。夏落葉の中とい
ふ所に作者の拘りがある。常緑樹の落葉は顔に
当ると結構痛かつたと記憶してゐる。まどろみ
のやうな大和言葉は漢字よりひらがなが似つか
はしい。せめて“み”か“む”の送りがながあ
るとよい。

実むらさき並替へてる診察券

赤座 典子

秋も深くなると葎の葉も落ち紫式部の実が目

につくやうになる。並べ替えるほどの数の診察券。体の気になる所が幾つかあるのは誰でも同じ。体が感じる晩秋のおもひを即物的にさらりと読んでゐて深い。

尻上りして見る天の高さかな

木村茂登子

踏台などから下りる時随分下の方に床があるなどおもふやうになった。五〇cmほどの台でも目の位置からは一間ほど下になることになる。掲句は逆で地に近く目の位置がある。それゆゑ「天の高さ」といふ訳。季題の天高しとは違ふ使ひ方。厳密には無季である、が何%かは季語の働きを有してゐるかもしれない。それにしても若々しい。逆上りでなく尻上りはほほゑましい。

通巻
200号記念

俳句界

2013年3月号

平成名句大鑑

—現代俳句を代表する俳人、
五百名の自選十句—

別冊付録 永久保存版

蛇笏賞作家、各協会賞受賞作家など著名俳人をはじめ日本全国の實力俳人、平成俳壇を彩る五千句を一挙掲載！
一人一ページ掲載でゆったりと見やすいレイアウト、かつてない規模、約五百ページの平成秀句一覽

（カテゴリー）
主宰推薦！

結社期待の若手俳人50

20代、30代までの結社推薦による若手俳人総勢50人を一挙クローズアップ掲載！
今後の俳壇期待若手俳人の代表句競詠

◆充実の連載陣

○恋衣恋衣／句・嵐まどか絵・わたせせいぞう
○書斎訪問／塩川雄三 ○巻頭句のゆくえ
／岸本尚毅 ○ふたりの母（最終回）／山本

安見子 ○俳句、その地／大牧広 ○華
瀬亭日常／矢島康吉 ○受験巡礼／今井聖

○句鑑賞／酒井佐忠・石井いさお・川越歌澄

佐高信の甘口でコンニチハ！
額瀨あや（映画監督）



※一部変更の可能性あります。
株式会社 文学の森

お求めは……〒169-0075 東京都新宿区裏田馬場2-1-2田島ビル6F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

八田木枯回想

その六

―夕焼けて西の十萬億土透く 誓子

阿部寒林

(承前)

木枯が示した写真を見るとその大きさもさることながら根元の伐り口を見ても洞^{うろ}な
ど全くなく木目の詰まった完全無欠な材質ということが想像出来た。唯残念なことに
は木枯の話では伐採の場所が場所だけに原木のままでは搬出出来ず其の場で運搬可能
な寸法に挽いて搬んだそうである。従つて同地方で即売却出来たために御礼としてこ
の天井板と腰板を差し上げることにしたとの話であつた。萬治社長は深川富岡八幡宮
と成田深川不動尊の総代をされている人であるから有難く頂いた。早速高野杉の天井

板を建築中の客間の天井に使用した。来訪の誰にでも「八田さんから頂いた有難い高野山奥ノ院の杉の太木からの天井板です」と自慢していた。頭上を仰ぐ客は材を知る人程激賞していた。

後年同棲の女性の死去に遭い市ヶ谷加賀町に総櫓の邸宅（四百坪位）を造り独り生活が暫らく続いた。この間の事情は木枯の知らぬことであつたが深川木場の銘木問屋の中では「長谷萬」の存在は特異な立場となつた。

店内で木枯が俳句を創る人だと知る者が僕の他に会計責任者の実兄英雄（萬縁同人）同水沼岳子、それに萬治社長（木川）がホトトギス同人島田みつ子に師事、ときているから木枯が俳句を忘れたくとも不可能な日常だつたと思う。

なを八幡神社の妾宅はその後、後援会会長でもあつた関係もあつてか、後の外務大臣柿沢一家に貸すことになつた。現在は他人のものになつているかも知れない。

ぼくの石田波郷宅訪問の二度目は木枯を誘い共に長谷萬本店から自転車で砂町へ走つた。突然の訪問でも再度なので快く接してくれた。『俳句』の木枯年譜では昭和二十一年頃となつているがぼくも木枯も『天狼』創刊後、そして波郷編集『現代俳句』創刊以後であるからあれは間違ひである。訪問時丁度石川桂郎が来ていてすぐぼくたちに遠慮して日向の縁に移ってくれた。どちらかといへば寡黙がちな木枯であつたが波郷を目の前にして話題は豊富のようだつたと記憶する。この時のぼくたち二人はい

まにしてみれば石田波郷という敬愛する俳人との今生の別れであった。波郷は昭和四十三年四月に遺句集となつて了った『酒中花』を世に送つたが身は清瀬から抜けることが出来ず翌四十四年秋に死去、深大寺の霊園に静かに眠られている。『酒中花』より数句。

病室にリラの香のあり復活祭

波郷

萩咲けばわれの呼吸も易くなりぬ

酸素足ればわが掌も赤し梅擬

山鳩も乏しくなりぬ草城忌

病院に豆撒きて妻帰りけり

昭和三十年後半の頃から木枯の姿は木場には紀州材が入荷してくる時以外に余り見えなくなった。『天狼』でいえば昭和三十六年七月号でいきなり巻頭を獲得しているのであるから関係者は少々驚き且つ期待したのは当然である。誓子は選評で「木枯作品を見ざるに久しい。この作家のカムバックで、遠星集に新風が捲き起るだろう」と期待を寄せている。

寒林宛の誓子書簡（昭和三十六年九月二十六日）欄外に「木枯君創作力回復しまし

た」と書かれている。しかし期待に反して木枯の作品は長期にわたって見ることはできなかった。

木材界も昭和三十年代―四十年と好景気の波に乗り、いつの間にか木枯は木場へも姿を見せなくなった時期があった。偶々木枯と会った時、青山のスナックへ新宿のクラブで遊んだ看板の時間に寄ったことがある。木枯の話では例の久居の材木商Bが経営している深夜営業の店で東京での商用のたびに馴染んだ女性にその店を託しているとのことであった。木枯は上戸、ぼくは典型的な下戸。木場の同業者たちの夜の付き合いでも専ら食の方であったが、徐々に少しは馴れるようになった。

夜遊びは業界の景気に左右されることは当然のことである。この夜の社交場では本所方面の木場の人たちは錦糸町（当時の駅裏）。深川の僕たちの場合は勿論銀座―赤坂―六本木というコース。ここで意外なのは兜町の株やさんたちは上野広小路。（総て高級クラブ対象）

（続）

十一月号正誤

木犀匂ふ月経にして熟睡^{うまい}なす

六 林 男

脚冷えて立ちて見てぬし孤児の野球



中野坂上『公園のベンチ』

後方 高島茂氏



松崎豊氏と市ヶ谷にて



2003/8/2 晩紅舎にて

「物狂幟裡外」一幕

せぐれわし郎一

幾度も息を吸はされ寒半ば

初旅は一月二日から四日まで娘に連れられて蔵王山麓の遠刈田温泉へ、上野から到着駅は白石蔵王駅、あちこちに雪が残っている。宿には入らず、すぐにバスを乗り継ぎ中継点まで約五十分、そこは既に雪景色。スノーボード、スキーマの姿が見える。そこから雪上車に乗り込む。ただ雪の中道なき道を小さな先導車に従ってガクンガクンと進むが座り心地の悪いこと。一時間ばかりで到着、樹氷を観賞することができた。ここは刈田岳と言いたい。蔵王のシンボル、樹氷は上質で怪物然としている処からモンスターと呼ばれる。そこは三十分位で下山、温泉宿へ。何としても老人は出で湯に沈むのが一番である。宿の名は「だいこんの花」部屋はすべて離れ家で窓から木々をリスが上り下りするのが眺められた。

何が起るか解らぬ一年、雪の静寂からの出発である。

△二〇〇九・一・一〇◇

福島が目のある寒さかな

正月もあつてなく過ぎてしまった。それでも近年は松を過ぎて我が家の前を多くの人々が通る。山ノ手七福神詣での一環で神楽坂、善国寺毘沙門天から或いは抜弁天蔵島神社からの賑わいである。勿論、熟年層高齢者の顔触れだが、日本人の信仰心の篤さであろう。

さて、一月八日の新聞で俳優の二谷英明氏の逝去を知った。つくづく時代の流れを思う。抜け弁天を余丁町通りを入ると、すぐ右側のアパート（リンゴ園）に二谷氏が売り出しの頃住んでいたのを思い出した。道幅の狭かった昭和三十年頃の余丁町風景である。

将棋ソフトに米長永世棋聖が敗退。豪華客船がイタリア沖座礁のニュースが紙上に。原因はサービス過剰ミスのような。阪神・淡路大震災から十七年と言う。東日本大震災と重ねて身辺大事な年。

△二〇二一・一・一七◇

私は『獐』を駆足で作り続けてきた。立ち止ることも振り返ることもなく十余年を過した。いま改めて手にして良くやってきたなと思った。『獐』は廃刊になって久しい。私が退いた以後の獐も廃刊のいきさつも知らない。ふと立ち止って今年は高島茂の声を聴きたくなった。題して「獐回頭」。高島茂の選評をこの一年読返してみることにした。

(佐藤喜孝)

獐 回 頭

高島茂 選評

渡良瀬行

その冬は高瀬舟ゆく煉瓦積み

吉弘 恭子

逢はずして行かば惜しけむまくらがのこが漕ぐ船に君も逢はぬかも（万葉集）

利根川と渡良瀬が合流する処が古河である。むかしから古河は川駅水都として栄えた処である。三国橋という橋がある。三つの国の境の場所でもある。渡良瀬川の北辺に、東京駅や横浜の倉庫などを造った煉瓦の窯場がある。古色蒼然たる感じの煉瓦工場である。そこで造られた煉瓦は船に積まれ川を下って行ったのである。いまは船便はない。その冬とは、渡良瀬に亘って昔を偲び、煉瓦窯のことを想いつつ詠ったのである。高瀬舟もよい。吟行の作品として秀れている。

(一九九四・二)

投げし萱ほどけつつ行く冬の川

宇都宮敦子

萱の束を川に捨てた。その萱が少しづつ解かれたように散って流れてゆく。(ほどけつつ行く)と

いう措辞がこの句を上質にした。写生句としても心情句にしても冬の川の景をよく現している。

重箱の慈姑先づ取る呆け老人

石森 和子

お正月である。料理をお重箱に詰めて、一家揃ってお祝いをする。老人もその席に坐る。重箱の中には蒲鉾・海老・かずの子・伊達巻・金とんももある。ごまめ・芋・牛蒡・にんじん。老人はそのお重の中から慈姑を取ったのである。駄も頭も不自由な、その老人には端の人たちも氣を使つて、お皿にいろいろ盛つてあげているのである。それにもかかわらず慈姑に老人の食指は集中したのである。正月の一家の団欒をこのように捉えることは並ではない。

(一九九四・二)

白梅の散りはじめをり雪の上

佐藤 喜孝

春の未だ浅い、二月頃から白梅は咲きはじめる。紅梅は白梅にくらべると、半月近く遅くなるようである。白い梅の花は、純白には違いないが、どこか翠を帯びた花びらを思わせる。その梅がちらちらと未だ雪の積もっている上に散りはじめたのである。桜と同じように梅も古くから多くの俳人によって詠われている。それだけに作品にするのには類型類想が多く、詠みづらい季語である。この俳句も梅散るというだけでは類句が多いが、白い雪の上に白い梅の花が散るというところが、おなじ梅散るという俳句であるが、違いの出た作品である。平明な表現で詠われているが、叙情詩となっているのがよい。

(一九九八・四)

あとがき

「あを」も十三年目に入った。楽しいこと、悲しいこと、絢い交ぜである。今年はいよいよことばかり続くやうにと願つてゐる。

創刊以来続いた王岩先生の玉稿をしばらくお休みにすることになった。この間、蕪村研究は和泉書院から上梓されたのは慶賀の至りであつた。あを会員の俳句を漢詩に訳して下さり贅沢な思ひをした。そして江戸俳諧と中国文学のつながりを前書から探る労作を61回も書いていただけた。文学の世界では日中の貿易は一方的に輸入超過のやうである。先生の蕪村漢訳が中国で上梓されれば片思ひのやうな状態も少し改善されることでしょう。だが日中の政治情勢故か出版の話が行き詰つてゐるやうである。先生の「近世俳諧と漢詩文」に登場する俳人は有名俳人の他に不勉強な私が全く知らない人も登場した。その都度図書館に行き、どんな句を作った人か調べに行った。調べても全く作品の分

らない人もいて、先生の猛勉強振りの一端を伺へた。本当にありがとございました。

ご厚志多謝

大山 夏子 様

田中 藤穂 様

芝 尚子 様

東 亜 未 様

二〇一三年一月号

発行日 一月十三日

発行所 東京都中野区中央2・50・3
電話 090・9828・4244

ファックス 03・6908・6038

印刷・製本・レイアウト

カット／恩田秋夫・松村美智子
竹僊房

郵便振替 会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年
00130・655526（あを発行所）

乱丁・落丁お取替えます。

